

委員等意見の反映について（行動計画改定関係）

平成 28 年度第 4 回協議会（平成 29 年 3 月 16 日）での主な意見

意見概要	対応（案）
<p>①名称</p> <ul style="list-style-type: none"> 環境教育に限らず、学校は地域の企業との関わりが必ずあり、様々なことを実施している。地域ごと地域ならではのやり方を行動計画で示すという観点から、行動計画の名前を変えたほうが良いのかも検討する。 	（今後の協議会で検討予定）
<p>②目的・ビジョン</p> <ul style="list-style-type: none"> 目的や効果の認識、価値観の共通化が必要。 「一人ひとりが考え行動を変革する」ことにつながる環境学習という方向性は良い。 行動計画で具体的に何を実現するかということを明確にする。 行動だけにとどまらず、習慣に変えていくところまでたどり着けると良い。 すべての主体に共通する大きな柱を示し、各主体がどのように使うかをそれぞれ考えようといったものにする。 地域に根差した環境学習は市町村が担う面が大きい。県がそれを行動計画でどのように支援・補完・先導するのか考える必要がある。 市町村と県では役割が異なる。市町村や企業がやりやすいような器を作るにはどうしたらよいかを書いてある行動計画とする。 環境教育は、目的でなく手段。各分野の施策の中に環境教育の手法をどのように取り込ませていくかというアプローチを考える。 改定を検討する上で挙げられた 4 つのキーワードは、環境学習だけでなく様々なことにつながっており、環境学習だけで達成するものではない。 自分たちが環境教育に取り組んだことで起きた変化が見えると取組はより進んでいく。具体的に愛知県の環境教育はこの部分にアプローチをしてこのように変えるといった目標を作り、下から積み上げるような行動計画もよい。 	環境学習を通して、学びを行動につながる力を育むことを明記することで、関係者間で目的を共有すること。この育む力は、段階的に示すことで、各主体の取組の発展を促す。

意見概要	対応（案）
<p>③内容</p> <ul style="list-style-type: none"> もっと県民に環境学習や環境教育を身近に感じてもらうためにはどうしたらよいかということが課題 県民に届くような行動計画や広め方を考える 	最も身近で、毎日の行動の場である「家庭」を「環境学習に取り組む主体」として新たに位置づける。（家庭での学びを効果的にする方策等については、今後の協議会で検討予定）
<ul style="list-style-type: none"> 各主体の良い点を伸ばしていくのか、悪いところを改善していくのかについて考える。 各主体が持っている力や意欲、資源をどのようにこの計画の中で活かしていくか考える 現在の計画は、「全ての主体がそれぞれ環境教育に取り組みましょう、県全体としてはこうしたい」というものであるのに対し、「各主体が持っている力をどのように引き出すか」といった計画が必要 	「環境学習等を通して『育む力』を示して、それぞれの力を育むために各主体がどう寄与できるのかを、何らかの形で示していくことを検討する。また、環境学習等を効果的に実施するための「工夫点」を示し、現在の取組の一層の向上を促す。
<ul style="list-style-type: none"> 本当に学習が行動につながっているかという観点から、各主体や地域が実施する環境学習を応援するのが県の立場。県だからこそできることを踏まえた行動計画にする。 理念的で抽象的な行動計画でなく、具体的なものにすることでメリハリをつけられる。 次期学習指導要領では、深い学びに至るための具体的な方法が示されていない。行動計画で具体的な方法を示してみようか。 	環境学習等を効果的に実施するための「工夫点」を活用した具体例を何らかの形で示していくことを検討する。
<p>④指標</p> <ul style="list-style-type: none"> 次回改定時に評価を行うための指標を盛り込む。 成果が評価されやすい指標とする。 環境はずっと続けていくものであるため、短期的なものにならないように注意する必要がある。 評価結果には、各市町村の政策が関係する。 環境省の CO2 見える化プロジェクトのように、行動の結果が数字で見えると取り組みやすい 教育や家庭は数字に慣れていないため、数値目標の立て方には気を付ける必要がある 	（今後の協議会で検討予定）

<p>⑤その他</p> <ul style="list-style-type: none">➤ 愛知県らしいものにする。➤ 愛知県には様々な自然環境や産業の特色があるため、地域ごと、地域ならではのやり方や連携の方法を示す。➤ 高齢化が進んでおり、中高生と高齢者が関わる機会が増えていくという視点も踏まえる。➤ 主体的に協働を呼び掛ける余裕はなくても、他から提案してもらえると取り組めることは多い。	<p>環境学習等を効果的に実施するための「工夫点」として示し、これらを活用した具体例を何らかの形で示していくことを検討する。</p>
--	--